

# 北海道医歌人会詠草

八月六日

札幌 小国 孝徳

八月六日の夜半起き出でて「人間魚雷」肩をすくめて見つ居りたり  
八月六日の夜半をジャングルに将校ら集りて新型爆弾を論じ合ひにき  
ジャングルに出逢ひし参謀長に小国軍尉往診中の声ひびかひき  
マリアの黄痘なほも消えぬ日々古橋記録を更新したりき  
世界又日本文学全集計百二十三巻ほとほと読むなくおさらばをせむ

終戦の年

札幌 古屋 統

終戦の年憶るる七月の半ばを過ぎて冷雨止まねば  
国敗れ士気阻喪せし民くさを無惨に打ちし冷雨凶作  
凶作の年に捻ると言ひ伝ふ山の熊笹重く実を垂れ  
笹の実を粉に碾き餓えを凌ぐすべ昭和の民は既に知らざる  
食ふ米も焚く薪もなき秋深み還らぬ兄に母の老け込む

介護保険見直し

美唄 吉村 誠治

四月から老健の看取り認めらる老い行く人にも尊厳がある  
この冬は雪も少なく暖かし我が老健は穏やかに過ぐ  
案じたるインフルエンザは否定され胸部写真で誤嚥肺炎と  
リハビリも高令化進む入所者の恢復図る力には遠し  
待機する入所希望者更に増へ市の高令化率三割を超ゆ

ニリンソウ

札幌 浜島 泉

家々を抜けて分け入る湿地帯今は群れ咲くニリンソウの季  
雨上がり薄日を受けてテッセンがたをやかなれど凛と聞きて  
白帽を賜はる式の生徒らの眼差しに見る責務の心  
長く臥す人にも届けキャンドルとキャップの誓ひ希望失すまじ  
街角に犬を曳く人ふと違ふ学友にてや彼は春逝きし

不発弾

釧路 児玉 昌彦

河泥より現はれ出でし不発弾・戦争の悪夢呼び覚ますごと  
我が胸の奥にも深く眠れるか不発の弾のうづく夏の日  
今日からは昨日の正義くつがへり墨くろくろと教科書を塗る  
戦ひに敗れし男はこうべ垂れ女は迷はず強く生きんと  
国敗れ権威ついえしその日より我らの時代と活気づく人

酒と馬鹿の日々

栗山 高田 剛太

刺身よし煮ても焼いてもまた旨し今日も秋刀魚で酒を飲みおり  
麦畑金に輝く上富良野麦酒飲みつつ十勝岳望む  
サンゴ草赤く色づく能取湖を見下ろす宿で飲む酒や良し  
温泉と酒とゴルフとカラオケがあれば幸せ単純な吾  
宴会となれば騒ぐ血この吾の学生時代のままの馬鹿さよ

京都

旭川 稻積 文子

保津川の岸辺の岩に身を寄せて多くの亀等はひるねの如し  
竿ひとつたくみなさばきに身をまかせ岩間を縫って保津川下る  
繊細な心づくしの京料理粗野に馴れし口には途迷ふばかり  
広大な竹林にひそと囲まれて大河地伝次郎の別荘ありき  
贈られて花籠二つ華やぎて娘と嫁の笑顔の如し(母の日に)

自然のアンビバレンス

江別 三宅 浩次

夏山の遭難といふ報哀れ自然が示すアンビバレンス  
老人の住まひ一気に押し潰す土石流なる魔物恐ろし  
方円の器に随ふ水なれば優しくもあり厳しくもある  
南海の珊瑚の島にひたひたと波寄せ来るも温暖化といふ  
遠方のニュースで聞く災害を他人事よと思ふいつまで

北大植物園

札幌 山口 康徳

北大の植物園は巨木繁り昼なほ暗くジャングルかくやと  
政調費黒くぬりたる領収書庶民の暮しに眼を掩ひしや  
北特法にあらがふごとく外国の背にあるものは如何なるものや  
色あせし枯葉さらりと脱ぎすてて次の季節を待つ木遣まし  
蝟集せる観光客ら眼を凝らし精緻極むる花フェスタ愉る